

……月だって大して遠くない。たとえ月の世界へ行つたところで、ふり返つて眺めると、地球が見えるからね。いろんな星の中に、不潔で、けものように、いやらしい地球が見える。人間によつて汚されたのだ。そうなるまは、苦汁でも飲んで、それがぼくの腹の中を侵してゆくような気持ちかしてくる。どんな遠くへ行つても、逃げ出せない気がする。だけどぼくは一巡りしてくると、そんなことは、けろりとまた忘れてしまふのだよ。

全く恥かしい話だが、過去三百年の間に、人間はいつたにどうなつたろうか。人間はたまたもう働き虫になり果て、人間らしさを奪い去られ、真の人生も奪い去られてしまつた。ぼくはこの地球上からいま一度機械というやつを、いまわしい過失のようになぐり去り、産業主義の時代に徹底的にとどめをさしたいのだ。しかしぼくにも、誰にもそれができない以上、ぼくは自分の平和をつかみ、自分だけの生活を送ろうとしてみるほうが利口なのだろう。もしそれが得られるのならの話だが、それすら、ぼくにはいささか疑わしいのだ。

D・H・ロレンス著

チャタレイ夫人の恋人

十五章より